

(少し、いや、かなり長い)

はじめに

けっこうきつい一年でしたが私はがんばりまーす

今、二〇一八年の二月だ。

「はじめに」で、何を書こうかと思い、何気なく、昨年五月に出版された先生！シリーズ第一巻を開いてみた。前はどんなふうにしたかなーと思ったのだ。

そしたら、ずばり、次のようなタイトルが目飛びこんできた。

「はじめに——私が一時的に、悟り〴〵を開いた日」

そして、〴〵の内容はこうだ。

「苦しいときは仕方がないけれど、可能なきには相手と自分がうれしさを感じられることをすればいい。人生のなかでそれをできるだけ多くやって、死ねばいいんだ」

すっかり忘れていた。へーっ、そんなことを思ったんだ……みたいな感じである。

まー、「苦しいときは仕方がないけれど、………」と書いてあるので、(苦しくて)忘れていたとしても許されるだろう。というか、私くらいになると、自分の習性をよく知っているので、(苦しくて)忘れることを見越して、「苦しいときは仕方がないけれど、………」と書いたのだろう。きつと。

よく覚えてないけれど。

さて、昨年の「はじめに」では、[〃]悟り[〃]の話のあとに、(場面は一転して!) 研究室の動物について書いている。

……さすがだ。

一見、内容がまったく違うように見せかけて、[〃]悟り[〃]の内容を、私が大好きな動物とのちよつとしたふれあい(小ネタ話)のなかで、さりげなく感じさせようとしている。

場面が一転した分、[〃]悟り[〃]と動物の話がそれぞれ浮き上がって、知らず知らずのうちに心に響いてくる(読者の方は、えっ、そうかなー、などと思つて読み返し………てはならない)。[〃]悟り[〃]と動物の小ネタ話とが見事につながっているのだ。

で、今回の「はじめに」は？ 何から何につながるのか？ 読者の方は、私に、そう尋ねられるかもしれない。

鋭い!!

私も、今、それを考えていたのだ。

去年は、悟りから動物の小ネタ話に。

だったら今年も、悟りをふまえたうえで、苦しみから動物の小ネタ話に、という展開にしよう。それだ。それでいこう。

ちなみに、これまで、一一巻の先生！シリーズを出版してくださった築地書館の方々、なかでも、直接の担当者のH sさんは、今回の私が送った最初の状態の原稿を読まれて、とりあえずの受け取りの連絡もかねたメールのなかで次のように書かれていた。

「今回はなんだかしんみりしていました」

これまで一一回（つまり一一巻分）、同じような状況でH sさんから、第一印象を盛りこん

だメールを受け取ってきたが、しんみり。という感想ははじめてだった。

私は、正直言って、一瞬、「えっ？」と思った。つまり、私には、しんみり。を意識して書いた覚えはまったくなかったからだ。これまでと同様なタッチで書いたつもりだった。おしになるトピックも、私なりに、これまでに負けないくらい入れたつもりだった。

急いで私は、H s さんに送った原稿をパソコンで開いてザッと目を通してみた……。

H s さんの感想は正しいと認めざるを得なかった。

そして、これが「無意識の領域が人の行動や心理に影響を与える」ということなのか、と妙に納得したのだ。

一年間、いろいろときついことがあったから（特に虚弱体質の野生児である私にとっては）、行間が、知らず知らずのうちに、しんみり。になったのかもしれない。

ただし、私は、「H s さんに送った原稿をパソコンで開いてザッと目を通してみ」て、同時に確信したのだが、しんみり。は、けっして、後ろ向きのしんみり。ではない。共感や励まし、新たな思い、といったものを静かに感じるしんみり。、とでも言えばよいのだろうか。

「苦しい」や「きつい」のなかで、前を向こうとするような。

さて、小ネタの動物の話だ。

そういつた話はすぐにでもいーっばい思い出せる。

まずは、研究室で見つけた、名づけて「**昆虫おそうじロボット**」、あるいは「**バイオ・おそうじロボット**」の話だ。

「おそうじロボット」は（メーカーの会社名は省略させていただくが）、部屋を自動で動いて床のゴミを吸いとってくれる電動掃除機だ。

ただし、私の研究室では、おそうじロボットは使えない。床に障害物が多すぎるからだ。ロボットは障害物にはさまれたりして立ち往生してしまうにちがいないからだ。開けた床でなければロボットは働けないのである。

しかし!だ。あるとき私は、そんな私の研究室を、障害物をものともせず、床のゴミを引っかけながら動く物体を発見したのだ。そして、その物体は……機械ではなかったのだ!

床のゴミを引っかけながら動く物体、それは、「**バイオ・おそうじロボット**」とでも言うべき、昆虫（オサムシの仲間だと思う）だったのだ。

本棚の後ろあたりから出てきて、テーブルの下に進んでいったのだが、その昆虫の後ろ足には、なんと、**毛玉のような結構大きなゴミがくっついて**いるではないか。

つまりだ！ その昆虫は、研究室のなかの障害物をスリムな体ですり抜けながら、後肢の鉤爪つばさに次々とゴミを引っかけて動いていた。さらにゴミはゴミを引っかけ、棚の後ろから出てきたときには、ゴミ玉はさらに大きさを増していたのだ。

余談だが、私はITと生物との、実りある融合あはれにとっても興味をもっている。

そんな私が生み出した、融合あはれのなかの一つに、学生と情報系ITとの新しい融合、名づけ



「バイオ・おそうじロボット」。障害物のたくさんある私の研究室の床を、毛玉のようなゴミを後ろ足にくっつけて移動している

て「ヒューマン・クラウド」がある。

この革新的伝統情報技術はまだ私が極秘にしているので、当然、一般には広がってはいない。だから、**読者のみなさんも内緒にしていたきたいのだが**、じつは、次のような驚くべきアイデアなのだ。

そもそも「クラウド」（日本語に訳せば「雲」）とは、情報を、自分のパソコンや、自分の（USBメモリなどの）記憶媒体に保存するのではなく、各社が用意してくれている巨大な記憶の場（クラウド）に保存するシステムである。だから、どんな場所においても、そのクラウドに接続すれば、必要な自分の情報を引き出すことができる。安全面から言っても、自分のパソコンや記憶媒体を壊したり紛失したりしても、必要な情報はクラウドのなかに残っているから安心だ。

さて、ヒューマン・クラウドだ。

私くらいになると、自分に必要な情報をパソコンなどに保存していても、それをどこに保存したかがわからなくなる。もちろん、頭のなかに保存したら……数時間で消えていく。では、という事で手帳に書いたら、……これが最も有効な保存法なのだが、……見ることを忘れることがある。

ところが私には、**保存と呼び出しの秘密兵器**がある。

それは、必要な情報を、ゼミの学生（様）に保存してもらう（いただく）のだ。

要するに、ゼミの学生たちに、会議や懇親会、発表会等々について、時間や場所などを伝えておくのだ。そして、「懇親会の日時、場所は？」などとおうかがいを立てると、誰かが覚えていて教えてくれる。すばらしいシステムだ。これこそが、学生と情報系ITとの新しい融合「ヒューマン・クラウド」なのである。

このような「バイオ・おそうじロボット」や「ヒューマン・クラウド」……とてもよい生物・IT融合システムなのだが大きな問題も抱



わが「ヒューマン・クラウド」の面々。「ヒューマン・クラウド」についてはまだ極秘なので、内緒にしておいていただきたい

えている。永久的、というわけにはいかない、ということだ。

「パイオ・おそうじロボット」については、それを発見して喜んだ次の日から姿が見えなくなった。別の部屋に掃除に行ったのだろうか？ **働きつめで、生物から無生物になってしまった**のだろうか？

「ビューマン・クラウド」については、私が、新しい実験研究棟に引っ越しをしてから、それまでは廊下を隔ててゼミ室と向かいあっていた私の研究室が、ゼミ室から遠く遠く離れてしまったことが運用を阻害した。きわめて手軽な手段である言語によって、学生たちに情報を伝えておくことが困難になってしまったのだ。

おこれるものも久しからず……しんみり。

小ネタ話の二つ目。

東京大学名誉教授の養老孟司先生が委員長をされている「日本に健全な森をつくり直す委員会」が、環境省の委託を受けて、日本全国の小・中・高校に配布する「森里川海大好き！読本（仮称）」を編集中で、私も編集委員会のメンバーになっている。執筆もほぼ終わった。

今年（二〇一八年）には完成して、各学校に配布されるだろう。

昨年、「森里川海大好き！読本」の編集に関連して、鳥根県の津和野で、鳥根県の高校生たちと、自然に恵まれた地方の面白さを話し合うシンポジウムが開かれた。私も参加した。

そこで、高校生たちと話をしていて、興味深い、大げさに言えば「**高校生たちの自然をめぐる認知世界**」に出合った。次のような認知世界である。

高校生たちにとって、**昆虫は「虫」であって「動物」ではない**。「動物」とは鳥獣のことを指す（読者のみなさんのなかにも、同じように考えている方は多いと思う）。

私は、少しつきつめて聞いてみた。

私「エビは？」↓高校生「虫」、

私「じゃあカエルは？」↓高校生（少し考えて）「虫」、

私「じゃあへビは？」↓高校生（少し考えて）「虫」。

高校での「生物」の授業では、生物のなかには動物、植物、菌類、細菌類……があり、昆虫は動物に属すると教えられているはずだ。だから試験で聞かれたら、そう答えることが多いにちがいない。ところが、学校以外の日常になると、脳が、日常モードになるからだろうか、昆虫も、両生類も爬虫類も「動物」ではなくなるのだ。

じつは私は、一般社会にあるこういうった認識は、ずっと以前から多少気づいてはいた。「虫は動物ではない」「ミミズは虫だ」……。そして、津和野の高校生との話のなかでその認識をはっきり確認し、この話、やっぱりこれは面白いな、と心を動かされた。

それには次のような理由があった。

動物行動学や進化心理学といった、「進化的適応」を基盤にヒトの認知、心理、行動を考える学問分野では、「ヒトの脳内には、生物の認知に専用にくくプログラム領域が備わっており、そのなかには、生物の大まかな分類について、**ヒトに共通した本能的な分類体系のプログラム**が備わっている」という考え方が主流である。

フランスの著名な人類学者スコット・アトランは、『自然理解の認知的基礎 *Cognitive Foundations of Natural History*』という著作のなかで、現在知られているさまざまな文化において、生物の分類の仕方（狩猟採集が生活の一部として残っている自然民の生物分類から、先進国の人々の、科学ではない、生物分類）が骨格的な構造に関しては同じであることを述べている（このような、ヒトに共通した生物分類は、『**素朴生物学**』と呼ばれている）。

そして、高校生たちの生物分類認知……

私「エビは？」 ↓ 高校生「虫」、

私「じゃあカエルは？」↓高校生（少し考えて）「虫」、

私「じゃあへビは？」↓高校生（少し考えて）「虫」。

……である。

これは、高校生たちの脳内の「素朴生物学」プログラムが緩やかに作動した産物ではないか、というのが私の推察である。だから、私は、「面白い」と思ったのだ。ちなみに大学生も、生物学に関係のない同僚の人たちも、高校生たちと同様な認知を示すし、英語でも通常、insect（昆虫）はanimal（動物）に含まない。animalは、少なくともアメリカでは、津和野の高校生たちと同じく、鳥獸³を示す。

シンポジウムのと、宿舎にもどって、そのシンポジウムに参加されていた養老先生に、高校生たちの生物分類認知について話をしたところ、次のような返事が返ってきた。

「小林さん、漢字を考えてもらんよ」

確かにカエルは「蛙」、へビは「蛇」だ。虫がつく。さすが、おそれいりました。

つまり、昔の人々も高校生たちと同じ生物分類認知をしていた、というわけだ。

さて、シンポジウムのなかで話が盛り上がった話題の一つに「川のカサガサ」がある。

川の岸辺付近に、たも網を入れ、手足を使って、底をえぐるように揺らし、持ち上げると、たくさん的小魚や甲殻類、水生昆虫などの小動物が、いや、虫が捕れてくるのだ。それを高校生たちは「川のカサガサ」と呼んだ。

私は宿舎でその話もしながら、「川岸には特別たくさん生き物がいますからねー」と言った。すると、近くにおられた京都大学名誉教授の竹内典之先生が「森にも結構いるよ」と応じられた。

傘を逆さにして枝を揺らすと虫がいつぱい落ちてくるよ、と。

そうか！ そうだった。それは研究でも使う方法で、私も昔、よくやっていた。

そして**そこでひらめいた**。

じゃー、それを「川のカサガサ」に対抗して「**森のカサガサ**」と呼べばいい。そう呼んで子どもたちに実践してもらい、森を楽しんでもらえばいい。「森のカサガサ」………いいネーミ

ングだ。流行らせるためにはネーミングが重要だ。

少し前置きが長くなったが、この話が私の二つ目の「小ネタ話」につながっていくのである。

大学に帰った私は、「森のガサガサ」を広めるためにも達人になってやろうと、毎日とはいかななかったが、大学駐車場に隣接する森に入り「森のガサガサ」を続けた。たいていは帰宅時の夜だった。

確かに「ガサガサ」だ。以前とは違った面白さを覚え、枝葉から落ちて傘に入ってくるさまざまな虫。たちと、暗闇のなか、新鮮な目で対面することができた。

そんな虫たちのなかで、ここでは二つだけ読者のみなさんにご紹介したい。



「川のガサガサ」。川の岸辺付近にたも網を入れ、手足を使って底をえぐるように揺らして持ち上げると、たくさんの小魚や甲殻類、水生昆虫などが捕れてくる

次ページの写真だ。

何でこんな、人面、模様になっちゃったの。

同種たちが互いに認知するための信号的デザインか？ まさか捕食者への威嚇ではないだろう。ちよつと小さすぎるから、たとえば鳥も顔とは認知しないだろう。

でも、読者のみなさん。暗闇のなかでこの方たちをじつと見ていたら、なんだか不思議な気持ちになつてきますよ。

たとえば、孤独なピエロ、とか、孤独なプロレスラー………みたいな。

何か、とてもとてもつらいことでもあったのだろうか………みたいな。

やがてお二方は、それぞれの習性にしたがつて、傘の表面（裏側）を移動し、夜の闇へと消



「森のガサガサ」。傘を逆さにして枝を揺らすと、虫がいっぱい落ちてくる

えていかれた。それぞれの顔も見えなくなった
……しんみり。

三つ目の小ネタ話は、虫と動物と人（素朴生
物学では人は動物のくくりには入れてもらえな
い）がかかわる話である。

二〇一八年一月、大学でセンター試験があっ
た。私は本部にいて、何か問題が起こったら、
その対策をほかの人たちと相談して最終的な判
断を下す、という任務に就いていた（意外に思
われるかもしれないが、私だってやればでき
るのだ）。

ところで、センター試験の日は**学生の大学構
内への出入りが禁止**されていた。テストが行な



「森のガサガサ」で落ちこちてきた「人面虫」その1。ハナグモの
仲間で、花や草の陰でやって来る昆虫を待ち伏せして捕食する。こ
の模様には何か意味があるのだろうか？

われる棟への出入り禁止は絶対だが、それ以外の施設への出入りの可否は、それぞれの大学で決めることになっていた。鳥取環境大学では、それも含めて原則禁止ということにしていたのだ。ただし、事前に正当な願いが出されていれば、例外として出入りは許可されていた。

さて、テストが始まってしばらくして（緊張した時間帯だ！）、警備員から本部に連絡があった。

「ヤギ部の部員がヤギに餌をやらなければならぬので構内に入らせてほしいと言っています。どうしましょう？」

（ヤギ？ 餌？ 私は顧問として、テストの緊張感との落差が、面白いというか、ほかの本部の人の手前、恥ずかしいというか……、複雑



「森のガサガサ」で落ちこちてきた“人面虫”その2。クロメンガタスズメ。南方系の域で、日本では九州、関西を中心に生息している

な気持ちになった。」

本場で、実質的に中枢を担うIsさんが答えた。

「ヤギ部の餌やりについては事前に申し出があり、許可しています」

おーっ、ちゃんとしてるじゃん。私はそう思った。

そのあと、Isさんは私に（もちろん顧問であることはご存じだ）、「動物には餌をやらなとかわいそうですよね」みたいなことを言われた。そしてつけ加えられた。

「先生のところの大学院生のMkさんも、動物に餌をやらなければならぬということ、実験室への入室願いが出ています」

Mkさんは、河川の上流に棲む、とてもめず



センター試験中に餌をもらっていた動物その1。ヤギ部のヤギたち。もちろん事前届けは提出されていた。そりゃあ餌は食べないと一

らしい、したがってその習性や生態がほとんど知られていないカワネズミ（ネズミの仲間ではなくモグラの仲間である）を野外と実験室とで調べているのだ。

（うー、また、餌やりか……。必要なことだが、本部のほかの人の目が多少気にならんくもない。でもなんだか、面白い。）

それから、しばらくして、**警備員から緊急の連絡**があった。

「Ngという学生が、動物に餌をやりたいので実験室に入りたいと言っています」

Ngくんも私のゼミの学生だ。Ngくんは、卒業研究で「（人間の）食虫文化」について調べており、そのときは食虫用の虫としてコオロギを選び、料理法と効果的な繁殖法を探ってい



センター試験中に餌をもらっていた動物その2。Mkさんが調査中のカワネズミ。とてもめずらしい動物でまだ習性や生態がほとんどわかっていない。そりゃあ餌は食べないとなー

ただの。毎日の餌やりが欠かせなかったのだ。

ただし、Ngくんは事前の入室願いを出していなかった。**協議が必要だ。**

結局、警備員が実験室までずっとついて行くということになった。

ちなみに、あとで警備員さんから聞いたことだが、Mkさんは、警備員さんに「餌をやらないと動物が死んでしまうんです」と、何回も繰り返し言ったという。ヤギとカワネズミとコオロギ……への餌やり……、なんか面白いけどなんか肩身が狭いような……、しんみり。

四つ目（これでオシマイ）の小ネタ話は人々をめぐる話である。



センター試験中に餌をもらっていた動物その3。
Ngくんが研究中のコオロギ……事前の届けが出
ていなかったが、そりゃあ餌は食べないとな

今年の新年は、最初の授業をすっかり忘れていて、学生が研究室に呼びに来た。

でも今年は違っていた。そうそう失敗を繰り返しはしないのだ。私とはそういう人間なのだ。今年の冬休み明けの最初の授業は、ゆとりがあった。ゆとりをもつて授業を行ない、終わって研究室に帰ってきた。

その日は時間があったので、おもむろに、学生たちが授業の終わりに提出した質問・感想用紙に目を通した。いろいろ書かれたものなかに次のような感想があった（動物行動学の授業への質問・感想であり、文中の（ ）内は私が書いたものである。文章は学生が書いた、そのままのものだ）。

男女差別の話のところ（授業計画の一つの項目として男女差別をあげているわけではない。流れのなかで、動物行動学の視点から、たまたま話したのだ）、いつも自分なりに思っていたところが解決された気がする。基本的人権が守られているかどうかというところがスツときた。自由に選択できる社会が必要。今日も（今日もだ！）講義はとても納得できた。いつも（いつもだ！）動物行動学は疑問に感じる、他の人の考えを改めるなどして、納得させてくれる。

そうだろう、そうだろう。こういう感想は、**虚弱体質で偏つきやすい私**が沈んでいるときに、**いいタイミング**でいつも元気づけてくれる。**ありがたい**。

そして、読者の方から時々いたただく手紙にも元気づけられることがある。特に、「(私の本に)心が救われました」といった内容が書かれてあるときは、そうだ。ちなみに、妻に伝えるといつても、「あなたの本のどこに救われるのかしらねー」と言われる。私もそう思い、適当な巻を手にとって読んでみたり、掲載されている写真を表から裏から見てもみたりするのだが、……よくワカラナイ。

でも人生そういうものかもしれない。沈んだときもうれしいときも、とにかく少しずつ書きつづける。意図しない、そういうひたむきな姿勢が読者の方に通じるのかもしれない。間違いない。

私はブログ(フェイスブック、ツイッター)で、次のように書いたことがある。

「私の本に救われた」という内容の手紙を読者の方からいただくことがある。その読者はご存じだろうか。その読者の手紙で私が救われていることを。

そして、それを読まれた築地書館の方が次のようにツイッターでつぶやかれた。

出版社も、読者はがきでの励ましに救われることがある。

……しんみり。

そして、読者のみなさん、今回も、この本を読んでいただきありがとうございます。

しんみりもよいものだ。しんみりして、自分の内面に謙虚に触れ、必ずしも答えは出なくても、また歩き出す。そうやって、ホモ・サピエンスは、共感し、思いやり、熟慮することをさらに身につけていくのだ。間違いない。

築地書館のH sさんの「今回はなんだかしんみりしていました」のしんみりはこういうことだったのかどうかよくワカラナイ。でもまあ、いいか。

二〇一八年二月五日

小林朋道